

共産主義者組織統一 準備委員会会報

№ 7

1966年8月1日・15日合併号

目次

第5回組織統一準備委員会概要	準備委員会事務局	1
新しい党の出発のために	世田谷革新同志会有志	11
ひとりよがりはやめよう		
—組織統一準備委員会の仕事の成功のために—	吉田峰夫	16
☆地方通信		
共産主義者の交流懇談会が開かれました		18
☆質問と意見		
組織統一準備委員会御中	二本松地区組織統一準備会	20

全国代表者会議の準備のために 意志統一を要する問題について

—— 第五回組織準備委員会の概要 ——

第五回組織統一準備委員会は、七月三十日、三十一日の両日、東京で開かれた。会議は、石井信雄、いいだ・もも両同志を議長に進められ、志賀義雄委員長から準備委員会発足後の情勢について、また内藤知周事務局長から、日共（代々木）の路線転換や社革東京都組織の問題など、主体的条件の変化について、それぞれ報告があり、これらの問題について準備委員会は大要次の意思統一をおこない、全国代表者会議の準備を進めることになった。

I 準備委員会発足以後の情勢

① その後の情勢の発展は、平和共存と反独占民主改革が当面の重要な課題であることを確認した。

② アメリカ帝国主義のベトナム侵略はハノイ、ハイフォン爆撃によつて新しい段階にはいつた。社会主義国のベトナム民主共和国やラオス、カンボジアにまで拡大した。

これに対して、ベトナム民主共和国と南ベトナム解放民族戦線の抗戦はますます強まり、社会主義諸国や世界各国の支援と協力は拡大されている。日本でもベトナム連帯闘争は高まっている。

平和共存にたいするアメリカの侵犯とたたかつて、これを確立することが重要な任務となった。

③ 世界共産主義運動の総路線にもとづく統一は前進し、反対路線は次第に孤立した。ソ連共産党第二十三回大会はそれを示した。

(1) 日本共産党はこの反対路線から離れた。それはベトナム共同行動についての意見の相違によるものであつた。しかし、その「自主独立」はソ連共産党の修正主義に反対し、中国

(2)

共産党の教条主義に反対するといふもので、プロレタリア国際主義と対立した小ブルジョア民族主義の偏向である。

④ 世界資本主義体制の矛盾はさらにふかまり、帝国主義にたいする労働者階級の闘争は高揚している。先進国でも後進国でも大衆的ストライキ運動がみられる。労働者階級の国際的共同闘争、新しい統一の条件が成長している。先進国で反独占民主改革は切実な課題となった。

⑤ アメリカ帝国主義の孤立化は進んでいる。平和と平和共存のための闘争で、社会主義諸国家の団結、帝国主義諸国の労働者階級の統一と闘争の果す役割はきわめて重要である。

ベトナム侵略反対闘争の勝利は国際情勢を平和と平和共存の方向に決定的に転換させ新しい展望をひらく。このたかいに全力をあげ日本政府の戦争加担政策をやめさせるためにたたかうことは労働者階級と共産主義者の重要な任務である。

⑥ 日本資本主義は動労者を犠牲にして恐慌からぬけだしつつある。だが、設備と生産力の過剰は大きく、消費者物価のひきつづく上昇は国民生活を苦しめている。公債発行、ベトナム軍需に影響されたアメリカへの輸出増大、国際收支構造の変化は重大な矛盾をはらんでいる。中小企業の倒産水準はたかく、合理化の犠牲とされる労働者、人民諸階層と独占の矛盾は深まっている。

⑦ 日本資本主義をとりまく新しい国際的条件のもとで「産業再編成」は独占体の合言葉となった。その目標は独占体と国家の協力で、集中合併、系列企業の再編成を大規模にやり、これに応じて労働再編成を強行し、搾取・収奪の徹底によつて、独占利潤率を引きあげることである。

⑧ 日本独占の政治的方向は明白である。強化された独占体の国際的地位をさらに発展させ、アメリカ帝国主義との同盟を守りながら、独自の帝国主義的対外進出をつよめると、帝国主義的政治反動体制を、確立することである。

⑨ 佐藤内閣は、独占と自民党のながい間の懸案であつた、日韓条約、ILO国内法、地主報償、建国記念日制定などを強行してきた。ベトナム侵略への加担はしだいにこつ

になり、安保条約による協力 義務を明言するにいたつた。原潜寄港は恒常化し、安保延長、アメリカの「核のカサ」が公言され、沖縄県民の復帰要求は無視されている。日韓条約締結後の独占の南朝鮮進出強化、東南アジア閣僚会議、ソウル会議への参加、アジア開発銀行、インドネシア借款等々はアメリカと協力する帝国主義的政策のあらわれである。日米経済合同委員会は、ベトナム侵略への加担をつよめ、資本自由化に対応する姿勢と同時に対中国政策をめぐる日米の矛盾を明白にした。

ベトナム危機、中国の核実験はアメリカの「核のカサ」の下での自分自身の軍事力強化の要求をつよめた。

佐藤内閣は、勤労者を犠牲に独占の「安定成長」の道をひらこうとしている。物価安定を当面の主要な問題とするという政策は第一には総選挙対策であり、第二には賃金を抑制し、大衆収奪を強める政策である。これは大衆闘争を激化せずにはおかない。

政府は、三月以来、野党に先制攻撃をかけ、安保延長を既定事実として定着させながら民族主義を煽動し、民主的権利をつぎつぎに剝奪して七〇年への体制を準備している。その一つの有力な手段として小選挙区制は、自民党政権の永久化と憲法改悪への前進をねらいつついる。

反動攻勢の重要点は、労働組合を企業と資本家団体の利益に従わせる新しい労資協調体制に組みいれようとする動きである。

それと同時に、国家、地方自治体、社会公共生活全体に、民主主義を無内容とし、ゆがめ、独占支配に従属させるための攻撃がすすんでいる。とくに教育の分野の攻勢は、戦後民主主義の将来をめぐる重要な対決点である。

⑩ 日本の情勢はあまりにも重大な闘争へ転換しつつある。日本の進路をどうするかという問題がすべての階級・党派に回答をせまっている。

労働者階級は、独占と自民党の帝国主義的進路にたいして、平和共存とあらゆる分野にわたる反独占民主的改革の道を通ずる革命の展望を対置 これに応じた現情勢のもとで緊切な具体的要求綱領をかかげ、新しい国民的政治的統一をつくりあげるためにたたかうことこそ、労働者階級と共産主義者の党に課せられた任務である。

(3)

(4)

⑪ 日本の諸階級・諸党派は、いまその勢力を再編成し、激動する情勢にのぞむ体制を準備しつつある。

自民党、社会党、民社党から共産党にいたるまでの内部対立の発展や公明党の進出は、戦争と平和、政治的反動と民主的改革の闘争の切迫を反映したものである。

共産党の分裂、共産主義諸集団の分岐の基礎にはさらに党の路線、大衆運動にたいする政策、組織を新しい情勢にこたえるものにするための闘争である。ソ連共産党を修正主義と攻撃しつつ、いま中国共産党を教条主義と非難しはじめたのも、大衆闘争と戦争の危険との闘争にたいする恐怖から生まれたものである。

⑫ 現在共産主義者にとって緊急な第一の課題はベトナム侵略反対闘争を、適切な目標と方針のもとに強力な大衆運動に発展させることである。重要なことは平和闘争における労働者階級の独自の役割をつよめ、同時に広汎な大衆の平和要求を多様な形態で、自発的な行動に発展させ、新しい統一をつくりあげてゆくことである。

労働組合は平和と平和共存、反独占民主改革の闘争の背骨で、今度の総評大会の方針にもその役割をどうはたすかの努力があらわれている。これを正しく発展させることが共産主義者のさしせまつた重要な任務である。

労働運動、平和運動をはじめ、あらゆる分野の民主主義的運動を正しく発展させながら、労働者階級の統一を中軸に、国民的政治統一戦線の形式に具体的に前進しなければならない。労働者階級と反独占諸階層に基礎をおく諸政党、諸団体の緊急な課題のための共同闘争、統一行動はその第一歩である。

⑬ 日本の共産主義運動を意識的に分裂させて、その統一どころか共同行動までも拒否する代々木が、労働組合に向つて統一や共同行動の説法することは次第に反発を強めるわけである。

さいきんの代々木の「転換」は、これまでの代々木の反対路線が失敗したあらわれである。しかし、それは今日の情勢が共産主義者に要求している任務にこたえるものではない。正しい路線と真の統一をめざす共産主義者がまず結果として、労働者階級の間に単一の共産主義前衛党を建設するため奮闘しなければならない。これは、ますます緊切な課題となつた。

Ⅱ 準備委員会発足以後の主体的条件の変化

① 日本共産党(代々木)の「転換」について

(A) アメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争が拡大し急迫化するなかで、日本共産党(代々木)指導部は、ベトナム侵略戦争反対の国際共同行動の問題で、中国共産党指導部と明確に意見を異にするに至った。代々木指導部は、ソ連共産党指導部を現代修正主義と批判しつつも、これとの国際共同行動を主張し、中共指導部は反米統一戦線からソ連共産党指導部を排除すべきことを主張している。代々木指導部は、ふたたび「自主独立」を強調することによつて、中共指導部への追従路線から「転換」した。

米中戦争敢えて辞せずとする中共路線への追従が、日共(代々木)をインドネシア共産党と同様の状態におとし入れるかもしれないという危惧が、代々木指導部の「転換」の背後にあつたと思われる。この「転換」は、従つて、たんに国際路線の問題にとどまらず、大衆運動の指導方針にも一定の変化をもたらさずにはおかないであろう。しかし、それは世界共産主義運動の総路線への復帰を意味するものではなく、これまでも反米の極左的空文句を叫びながら、実践的には右翼日和見、議会主義的傾向の強かつた代々木指導部が、一段とその右翼日和見主義的動揺をつよめるものとなることは疑いなくところである。

代々木指導部は、今回の「転換」にあたつて、それを「転換」とは認めず、自分たちが一貫して、世界共産主義運動の総路線を堅持してきたかのように強弁している。彼らは九回大会決定の「国際共産主義運動とわが党の任務」を「赤旗」に再録し、この学習によつてみづからの一貫性を裏づけ、全党の動揺をおさえようとしている。しかし、この九回大会決定は、世界共産主義運動の総路線を歪曲して、これを現代修正主義と批判しているものである。代々木指導部が、これまでの原則的な誤りにより、日本の労働者階級と人民のたかいに重大な損失を与えたことの深刻かつ明確な自己批判がないならば、客観情勢の発展に迫られての「転換」は、なしくずしの「手直し」にとどまり。その原則的な、根深い誤りは克服されるべくもないのである。

この「手直し」や「転換」は、党内矛盾の激発を一時的に糊塗する役割を果たしている。これまで中共路線に批判と疑問をもつてきた党員は、この「転換」を歓迎するにとどまり、さらに進んで官本理論とそれに基くこれまでの誤りの批判に進もうとしていない。党内矛盾は今後官本Ⅱ自主独立派と中共派との対立となつて深刻化するであろう。

(B) この代々木指導部の転換から、第二「六全協」を予想し、そこからわれわれの当面の結集を批判する意見がある。また、この問題と関連して、現在結集を進めている組織統一準備委員会が「復帰コース」をとるのではないかというデマ、憶測のたぐいが流され、われわれの結集が代々木への「復帰コース」にすぎないという不当な非難攻撃も一部におこなわれている。

このような事情を考慮するとき、準備委員会が、わが国共産主義運動を統一する展望のなかで、当面の結集と党建設をどのように位置づけているかを明確にすることが、きわめて重要となつてゐる。

② わが国共産主義運動の真の統一のための闘争の展望

(A) われわれは三月全国会議の「まとめ」と「よびかけ」で、われわれの建設すべき党の性格、その思想的、政治的、組織的な基本路線を明確にした。われわれは、この基本路線において、組織的に統一し、党を建設する。この党は、さらにわが国共産主義運動の統一を進めることをみずからの重要な課題としている。その統一は「まとめ」と「よびかけ」の基本路線にもとづくものであることはいうまでもない。

(B) われわれの立場は以上の通りであつて、日本共産党(代々木)の根本的改造なくして、わが国共産主義運動の真の統一はありえない。このためには、われわれが当面の結集を成功させ、真にわが国労働者階級の要求にこたえる党を建設することが決定的に重要なのであつて、この党の発展によつて、日共(代々木)の根本的改造も促進されるであらう。われわれの党建設と日共(代々木)の内部革新とが、相関連して発展し、党と党との統一が可能となる。これが、どのような具体的展開を示すかは、今から予測することは困難であり、また必要でもない。重要なことは、「まとめ」と「よびかけ」の基本路線にたつて結集し、党を建

設することに全力をあげるということである。

③ 社革東京都組織の現状と結集方針

(A) 社革代表から社革東京都組織の現状について報告があり、準備委員会はこの問題が社革の内部問題として、「まとめ」と「よびかけ」の線にもとづいて効果的に解決されることを期待した。

(B) この機会に、準備委員会は三月会議の「まとめ」と「よびかけ」にもとづいて、その結集の事業を進めており、この基本方針を今後も堅持することをあらためて確認した。その結集方針は連合体的組織形態によるのではなく、直接党結成を進める立場に立つものである。われわれはこの結集方針に疑問や批判をもつ諸君とも、多様な形で結集を進めてゆく努力を今後もつづけるものである。

④ 以上の意志統一に立つて、準備委員会は八月の全国代表者会議の準備を進めることを決定した。

☆ 全国代表者会議の案内状について

一別項の案内状を確認。

ミオブザーバーについては、会議前の組織活動における話し合いのなかで、今回の結集に基本的に賛成であり、しかしなお若干の疑問や組織の事情などがあつて参加手続きをとれないという同志を招待するものであることを確認した。

三結集に賛成の諸君が参加手続きをこの会議までにとるよう組織活動を強めること。

☆ 平和運動での統一行動について

(7) 白川同志から、七月二十四日の平和運動についての共産主義者の集りについて、また松江同志から、ジュネーブの世評総会と被爆二十一周年原水禁世界大会の問題点が、それぞれ報告され、飯田同志からベ平連の日米市民会議の計画などが紹介された。

これらの報告をきき、とくに、原水禁世界大会にたいして、準備委員会に参加している組織と個人が、相互に共同して、この大会を成功させるための打ち合わせを、広島で行なうことが決められた。

——政治・組織方針作成の

作業状況とその推進について——

- ① 政治方針委員会と組織方針委員会からそれぞれ、今日までの作業の進展状況が報告され、それぞれの研究会の計画などが報告された。
- ② 準備委員会の計画する研究会は、これから始められる段階であるが、それぞれの組織や準備委員が中心となつて、自主的な研究会がはじめられている。これらの成果を準備委員会として十分摂取すること、その方法を考えることが指摘された。
- ③ そして、八月の全国代表者会議には、それぞれの委員から中間報告が行なわれなければならないが、このためには、その前に準備委員会をもち、それぞれの委員会報告を検討し、問題点を明確にして、全国代表者会議に報告することを確認した。

☆ 第六回準備委員会の開催について

第六回準備委員会を八月二十日、二十一日の二日間開く。議題は、全国代表者会議の準備とすることが確認された。

☆ 全国代表者会議の開催について

私たちは、本年三月「結集と統一をめざす全国会議」をもつて、組織統一準備委員会を組織し、全国会議の「まとめ」と「よびかけ」にもとづいて、その任務をすすめてきた。

その後の情勢の発展は、この「まとめ」と「よびかけ」があらかになっている共産主義者の結集と統一の課題を、ますます緊急、切実なものとしています。ベトナムの情勢はますます急迫の度を加えており日本の独占資本と佐藤内閣は、労働者階級と人民への経済的

・政治的な攻撃を一だんと強めています。わが国の政治の転換を要求し、政治的統一をめぐる声は強まっています。情勢の発展とわれわれの結集への努力が進むなかで日本共産党（代々木）指導部は、これまでの路線に一定の変更を加えつつあります。この事態の発展のなかで、私たちは、わが国共産主義運動の真の統一を達成するためには、三月の全国会議が「まとめ」と「よびかけ」であきらかにした基本路線にたつて、当面の結集を進めることが決定的に重要であるという確信を強めています。

私たちは、この「まとめ」と「よびかけ」を普及し、討論をおこし、準備委員会への組織的参加をもとめる活動を進めてきました。また、組織統一を達成するに必要な政治方針、組織方針を作成する方針を確定し、その作業を進めています。さらに、当面する切実な課題について共産主義者の共同行動を組織するための努力も行なっています。

これらの活動は、まだ十分な成果をおさめていません。私たちは第三回準備委員会（五月）で決定したように、九月に諸方針の草案を発表し、十一月に統一大会をもつ目標を功的に達成するためには、準備委員会の活動を一段と強める必要があると思います。

このために私たちは八月下旬全国代表者会議をめざして組織活動と方針作成の準備を統一的に前進させることを決めました。この会議にむけて準備委員会への参加をもとめる活動を精力的に展開すること。これらの諸君の協力を組織しつつ九月に発表する第一次草案の原案的なものを八月の全国代表者会議までに準備し、中間報告を行つて会議の討論にふしうるよう方針作成の作業を促進することを決めました。これらの努力のうえに、八月下旬の全国代表者会議では、これまでの結集状況その他諸般の情勢を検討して、統一大会の日時を最終的に決定することになっています。

私たちは、準備委員会にすでに参加している組織と個人が、この八月全代会議をめざして、より多くの同志が準備委員会に参加するよう組織活動を強めることを訴えます。

私たちの今進めている結果に、基本的に賛成される諸君が、準備委員会への参加手続きをとり、組織的に方針作成の仕事や組織活動に参加されることを訴えます。

私たちは、準備委員会の活動に批判や疑問をもっている諸君との交流を深め、その意志統一を前進させ準備委員会への参加をもとめる活動を強めたいと考えます。私たちはこれ

新しい党の出発のために

世田谷革新同志会有志

一

組織統一ないし新たな党のことが論議される場合、次のことは共通の前提となつてゐるといつてよいだろう。「それはマルクス主義的な党であり、マルクス主義者にとつて党は必要である。しかし、現在、党は存在しておらず、それ自体が党になりうる組織もない。」これらは公理である。ただし、証明するまでもなく明らかなこと、という意味ではなく、議論の前提というほどの意味である。実際のところ、その内容は人によつてかなりちがつてゐる。代々木の「方向転換」が、「結集」に微妙な影響を与えている、ということがかなり現実性を帯びて伝えられること自体、その一つの例証である。また、ある人々は、この公理から、できるだけ早い結党という結論を導びき、他の人々は、それは不可能だと思つてゐる。それは公理の実際的な中味がちがうからである。

「結集」を考える人々は、代々木を否定する、という点で、消極的に一致してゐる。しかし、それがどのような次元での否定であるかということでは、決して一致してはいなかつた。個人的・感情的反発、官僚主義批判、あれこれの政策の誤り、綱領次元での対立、といったところから、日本の階級斗争の中で代々木が果して来た・またこれから果すであろう役割についての評価の基本的なくいちがい、にいたる様々な見地がある。それは又、現時点におけるマルクス主義そのもののとらえ方のちがいとつながつてゐる。

私の基本的見地はこうである。マルクス主義が、スターリン（ないしそれ以前）からあとの硬化から脱し、現代の世界を深く広くとらえる豊かな世界観・思想であるためには、まだ多くの仕事がなしとげられなければならないだろう。むしろ私は、それがなければ、党はできないというつもりはない。しかし少なくとも、日本の現状と革命への大ざつばな道すじを明らかにし、マルクス主義の現代的再生を展望しうる透徹した理論なしに、党はできない。それをつくり出すことが、私たちの第一の任務である。

一方で、日本の社会は、かなり急なテンポで動き、階級斗争は激化している、この中へ可能を限りの仕方に参加することは、共産主義者の義務である。この点で「結集」を考えるすべての人々は一致するであろう。しかし現実には、いわゆる「結集」への努力がはじまつて以来、この面での（例えば反戦・平和運動などへの）私たち全体のとり組みは、非常に弱くさえなっているのである。

私たちは、こうして、二つの任務に当面している。この任務を、現在の時点で、最も有効に推進するために、どのような組織形態が可能であるか、必要であるか。これが組織統一の問題の具体的な内容である。

マルクス主義がどのような状況におちいつているか、革命の現実的な道すじはどういうものか、このような問題に対する痛切な飢餓感なしに、党はアブリアリに必要であり、それは少数は多数に従い地方は中央に従う民主集中の組織でなければならず、そのみが、組織の理論的・思想的豊かさを確保し、運動への能動的な参加を保証する、と無邪気に信じている議論に、私は組することはできない。

例えば社革は、「党建設の実践部隊」ないし「それ自体実質的に党である」という見地で五年間やつてきた。私は社革が一定の役割を果たしたことを評価するものである。しかし同時に、思想的、理論的に不毛であり、したがって運動の面でも限られた組織体質であつたことを否定することはできない。そこには「過剰な民主主義」があつた、といわれる。それは社革内で「議論がつくされた」ことの証明にさえ援用される。しかし、社革内で、有効・生産的な討論が組織された、ということがあつただろうか？

三月の「全国会議」では、この会議に結集してこない共産主義者の存在に多大の注意を払い、それがこの会議の成果をはかる尺度だという見地が再三強調された。それは社革に対する批判でもあつた。社革は、その少なからぬ部分を代表する人々を、その「組織原則」にもとづいて、この会議に参加させえなかつたのだから。

私は高みに立つて、社革を批判するつもりではない。私たち非代々木共産主義者の、痛切な体験としてそれを論じているのであり、それは、私たちのこれからの闘いの中で活かされねばならない、と考えているのである。

八月に再び全国会議が開かれるという。それは、社会の緊急の要請を横目で見ながら、抽象的で余り現実への有効性のない作文と、小じんまりと旧来の形式のとのつた「党」のための、事務的な準備としてではなく、私たちの中に分散してある戦闘的な、また理論的なエネルギーを、最大限に引き出し、組織するために、現時点で最も適切な（従つて過渡的な）組織形態を探り、つくり出すためのものでなければならない。（s）

二

準備委員会発足の前後から、私たちはその活動を批判と期待をまじえつつ、真剣に見守つて来た。三月全国会議の結論が、難航のすえ、あのような「まとめ」として反対・保留を明記する形式で発表されたこと、討論の最大公約数的終着点だけを概括するのではなく、ありのままの過程の姿で提出されたことの意味を、私たちは将来の結集を可能にする足場を設定するものとして評価した。そして此処から、討論の組織と討論内容の両面において、準備委員会の活動がいつその深まりと拡がりをみせるものと期待した。ところがその後の活動は、必ずしも私たちの期待のようには進んでいないようである。

その原因はいろいろあるであろうが、ひとつには、建設されるべき党の性格についての掘り下げが殆んど全く行なわれていない、否むしろ故意に避けられている、という点にあると私たちは思う。もちろんこの点に関して、これまで何も云われなかつた訳ではない。「よびかけ」のなかで既に、「労働者階級に基礎をおくマルクス・レーニン主義党」とか、「社会主義への日本の道をきりひらく党」とか、「創意と活力にみちた民主集中の党」とか、それ自体、非のうちどころのない立派な言葉が語られている。だが、これらの立派な言葉も、言葉としては今では陳腐化してしまつて、それだけでは現実的には何の意味も持たえない空文句となつている。最初の一步はそれでもいいとしても、現在必要なことは、次の一步、その次の一步である。それは党のイメージを行動の面から内容的に漸次明確化してゆく一歩々々でなくてはならない。ところが、この次の一步が未だに踏み出されてい

ない。これでは準備委は組織的に拡大するどころか、先細りにやがて分散解消するほかはないであろう。

そういう不幸な結果にならないことを願つて、ひとこと私たちの見解を述べさせてもらいたい。前衛不在かと云われて既に久しい。私たちも無い智慧、無い力をしぼつて、前衛のあるべき姿を模索しつづけて来た。果して現代において前衛は可能なのか、必要なのか、という問いにまで立ち帰つて検討もした。そうしてなお模索中であるが、現在のところ私たちの到達点は次の三点に要約できる。(1)古典的な前衛概念はもはや現実的でない。(2)スターリンコミンテルン型の党はプロレタリアートと人間性にとつて寧ろ禍害である。(3)党の前衛性はその綱領にではなく、そのモラル・思想に求められねばならない。以上三点すべて、既に多くの人々から云われていることで、目新しいものは何もないが、準備委が「前衛として日本の人民に責任を負う党の建設」を目ざすのであれば、この三点はその出発の基礎でなければならぬと私たちは思う。(1)の点について更に云えば、「真のレーニンの党」などといつても、必要なのはそのモラルを受けつぐことであつて、決して、その形式をまねることではないはずだ。形式をまねるなら、現代では偏狭な依怙地なセクト的小集団ができ上るだけだろう。その現実的破産は既に実験済みである。(2)の点については、準備委の一部には、スターリン批判に対して、ソ連共産党のその限界を越えない範囲に止めねばならないとする意見が根強く残つていると聞く。また一部には、モスクワ宣言・声明に対する忠誠を固執する人々があると聞く。こうした卑しい願慮が一掃されないかぎり、とうてい新しい党など望むべくもないことをかさねて強調しておきたい。(3)については、綱領が問題だつたのなら、あえて組織の分裂までして新しい党の建設にかななければならぬ理由はなかつたはずだということを特に断つておきたい。現在の社会党・共産党が前衛の任にたえないのは、その綱領に誤りがあるからではない。綱領だけを取りあげるなら、社・共のそれでも決して根本的に誤つてゐるわけではないから、現実の政治勢力としての社・共を考慮すれば、このほかに第三の党をつくるより、寧ろ社・共を強化拡大する方が日本の革命に近づく正道ではないか、という見解もなりたつ。私たちにそうさせないものは、社・共の綱領の不十分さにあるのではなく、その綱領を内から支える党のモ

ラルにおいて根本的な欠陥を見出すからである。準備委員会への私たちの期待も主としてここから出ている。

では準備委員会はこの私たちの期待にどう答えてくれているか。モラルは美しい言葉をならべることで表現されるのではなく、まづ何よりも行動で表現されるものであろう。「民主主義の最高の型、社会主義的民主主義」を宣言したあのスターリン憲法が公布されたのは一九三六年の末であつた。それにつづく三七、三八年は、最も反民主主義的・非人道的な血の粛正が荒れ狂つた時代であつた。このことを私たちは決して忘れない。だから準備委のこの点に關しての志向を、私たちはその活動、その組織・運営の面から読みとらねばならないことになる。だが、そうすると、そこに見出されるものは、たくさんの清新な意見が出されているにもかかわらず、会の活動全体としては、従来の否定的性格をそのまま引きずっている旧い党概念である。たとえば準備委の議長が志賀義雄となつてゐることである。部分核停条約支持をふくめて今日までの志賀氏は、前にものべた三点の新しい党概念からは程遠い存在である。その志賀氏が、たとえ暫定的なものとしても、準備委員会を代表するとしたら、その志向する党が、綱領の如何にかかわらず、どのような性格のものになるかほど推察がつくと云つてよいだろう。なかには「あれは看板にすぎない、どうにでも我々が操縦できるのだ」といつた人がある（東京にも、大阪にも）。会のなかで積極的に活動している人の言であるから、あるいわこれが会の支配的な底意かも知れない。だが、そうだとしたら、いつそう忌むらしいことである。私たちは看板なら看板として、それを実体の端的な代表的表現とみる。そうみるのが素直な一般大衆の常識であらう。これを無視するのは大衆を愚弄する女人政治屋の感覚である。こうした欺瞞は、前衛党にとつてはもちろん、大衆組織一般にとつてさえ致命的である。

要するに私たちが準備委員会に要望したいことは、その志向する党が新しい党であることとはつきり大胆に表明すべきだ、ということである。党名を日本共産党（統一派）としたいという意見も出ているそうだが、その根性の卑しさとともに、その政治的理論的誤りを私たちは指摘したい。

(D)

ひとりよがりはやめよう！

！組織統一準備委員会の仕事の成功のために！

吉 田 峰 夫

『会報』第五号所載の武田徹という人の「春日氏の〈組織統一の前進のために〉」を読んで」という一文は、卒直にいつて、私の周辺の、特に若い人たちが、これではまったく幻滅だ、といっている。このような発想と態度では「組織統一準備委員会」というものは解体するほかないであろう。

まず第一に、武田さんは（「社革」の人だということであるが）、「結党」への「情熱と決意」は、すでに充分であるという口ぶりで、春日氏はこの「敵然たる事実」を認識してゐない、春日氏の「現実に立脚しない観念論的空説のお説教には……きあきしている」といつている。武田さんもまた「社革」、「日本のこえ」の「合意書」にもとづいて、また三月全国会議の準備過程で出された「問題提起」など、さらに三月会議を経て、あの「まとめ」で、党をただちに作るに充分な条件がある、というような判断に立つておられるようである。

しかし、私たちの理解では、三月全国会議の討論とその「まとめ」は、あきらかにその条件は不十分であるという認識の上に立つている。そうであればこそ「政治方針」や「組織方針」の作成についても、日常的な実践的諸課題にこたえてゆくためにも、未結集の、未参加の共産主義諸集団と個人の協力をひろく求めてゆかなければならぬことを「まとめ」のなかで第一に強調しているのである。

私たちは「現実に立脚し」て、「結党」にいたる私たちの内と外との諸条件がすでに充分であるとはみていない。武田さんは春日氏の論文を「現実に立脚しない観念論的空説」と非難されているが、実は武田さんこそ、自分の「情熱と決意」と、要請されている結党のための条件、客観的現実とをとりちがえるという、きわめて単純なそれこそ「観念論的空説」におちいつてゐるのではないか。

つぎに、武田さんは、三月会議によつて組織された組織統一準備委員会は、とくに、「社革」と「こえ」とがその過半数を占めないという配慮のもとに構成されており、春日氏らも参加して、共同して仕事をすすめているという事実を無視して、「観念論的空説」とか「周知のように」「すでに歴史的に検証済みの古い〈社会民主主義的組織論〉」とか、「古い持論を表現をかえて〈準備委員会〉にもちこんでいるにすぎない」とか、「あきあきしている」とか一定のムードをつくり、春日氏らと「準備委員会」全体を、早くも対立させてしまうような発言をしているが、それは組織統一準備委員会を形成している共同の基盤を崩り崩すものである。武田さんの発言は「準備委員会」のなかになにか異分子がしのびこんで、形をかえて「古い持論」をもちこもうとしている！ 警戒せよ！ といつてゐるかのである。このように組織統一準備委員会の内部でおたがいに相手をなにか異質なものとし、これを警戒し、これと思想闘争をやらねばならぬ、と身がまえるようなことであつたら「十一月結党」などは、ますます見込みがなくなるだろうし、いずれか一つが他を克服するか、排除しないかぎりおさまりがつかないことになるだろう。私たちはこのような考え方を捨ててしまわなければならない。私たちは、組織統一準備委員会は「周知のように……すでに歴史的に検証済み」のこのような古い発想と態度を克服することによつてのみ、その成功をかちとることができるとみており、そのように期待している。

武田さんは数年前から松や杉の栽培を研究している「そうだが、そういう「たとえ」はなしをするひまに、社革五年、「こえ」二年の経過をよく考えてみると、「立派な苗木の選定もすんだ」、あとは「植えつければ」よいのだ……というように、そんな単純、簡単なものではないことがお判りになるだろう。社会党も社会主義の党といつてゐる、代々木は正真正銘の共産党だと自称している。「真のレーニンの党」と自称するもう一つの「党」を作ることが、私たちの課題ではない。私たちの課題は、客観的に共産主義的前衛としてその機能を果しうる党を作ることである。現在、組織統一準備委員会を形成している諸組織も、またその他の共産主義集団もともに苦心し、努力していることは、目標やイメージよりも、労働者階級と民主主義勢力の日常闘争と活動に根ざしながら、「真の共産主義前衛党」「新しい党」の素質をもつたものをどのようにして形成して行くかというこ

とである。武田さんのように滑稽なまでに、物事を単純化することは、はなはだしい主観主義、独善主義におちいることであり、それは同時に、自分に同調しない人たちの意見や努力というものを軽視し、蔑視することであつて、そういう傾向は組織統一準備委員会の共同の事業を根底から破壊するであらう。

「春日氏の〈組織論〉」にかぎらず、だれの意見でも、反対したり、批判したりすることは自由であり、必要でもある。しかし、それには武田さんの「周知のように」というような言葉でごまかしてしまうのではなく、実質的な批判をおこなう必要がある。そうでなければ、私たちのあいだの前進的な相互批判というものにはならない。

最後に、私たちの組織統一準備委員会は、これまでの杜革、「こゑ」、統社同、その他の共産主義集団と同格のものをもう一つ別に作ることもなければ、またなにか「選良」意識をもつて、他はすべて多かれ少なかれあやまつているという姿勢の組織を作ることでもない。そういうことなら、すべてがものもくあみである。三月の全国会議とその「まとめ」が、それとは全然別の志向性を示していることを武田さんらは、よく理解していたできた。

地方通信

共産主義者の交流懇談会が開かれました

共産主義者の「結集と統一」をめざす全国会議が一九六六年三月二十一日から三日間、東京で開催された。この会議には、共産党（代々木）にかつて籍を持っていた人たちが無党派の立場で活動されてきた人達、その他、多岐にわかれていた共産主義グループの人たちが参加しました。福島県からも、いくつかのグループと、〇名の代表が参加しました。会議は、「組織統一準備委員会」を発足させ、「まとめ」と「よびかけ」を発表し、全国の共産主義者に結集と統一を呼びかけました。

この「まとめ」と「よびかけ」に応じて××地方では、五月〇日、〇市で、初めて、共産主義者の交流懇談会が開かれました。この会には、「組織統一準備委員会」の一員

であり、作家である飯田も氏と西岡慶三郎氏が出席されました。この会には、共産党（代々木）から除名された人、離党された人、無党派の人、その他の共産主義グループの人が参加されました。

会は、「非代々木」の共産主義諸グループと共産主義者の結集と組織統一のために、その窓口が開かれたことを確認しました。つまり、結集と組織統一の為の必要な討論に積極的に参加することを参加者の全員一致で確認しました。

以上のごとき基礎的一致のうえで、「まとめ」と「よびかけ」が発表されるに到るまでの結集と統一運動にすでにあらわれており、それらの二文書のなかにも部分的にあらわれていると思われる同意し難き諸点について、数人の参加者から、つぎのような、するどい疑問と問題提起がなされました。これらの諸点の中には、今後の討論に直接ゆだねられるべきものも多数含まれています。

1 国際共産主義運動に対する総括と日本共産主義運動に対する正しい総括が充分なされていないのではないか。特に、その否定的遺産をどのように克服していくかが明らかでない。

2 全国会議に出席し、結集に参加しているのは、かつて代々木にいた人ばかりではないか。何故、代々木を出なければならなかったのか。脱党から結集運動への「転進」の必然性が明らかでない。

3 中ソ論争について態度が明らかでないが、二者択一の感じが強い。ソ連派一辺倒の感をまぬがれない。

4 「結集」ということが、単なる算術的な和になる危険性はないか。

5 政治方針と組織展望が明らかにされていない。情勢についての階級的分析が充分なされていないために、「結集と統一」の根本が極めて精神主義的に感じられる。

6 この運動に参加することによつて、自分の所属する大衆団体が分裂させられる危険はないか。

7 別党コース（新党結成）をとるか、革命的反対派の立場を通すのか。

更につぎのようなことを申し合えました。

- 1 共産主義者の全国的結集と統一を、全人民の利益と結びつけ、真に階級的なものとして成功させるために地方からの正しい運動を積みあげる。
- 2 交流懇談会を今後も継続して、討論内容を中央、地方の各グループに伝えていく。
- 3 「組織統一準備委員会」と連絡をとるが、直接の下部機関とはならない。
- 4 世話人代表をX氏とする。
- 5 「組織統一準備委員会」の会報を講読する（一カ月一〇〇円）

“運動”の発展をきして

共産主義者の交流懇談会世話人

質問と意見

共産主義者組織統一の大業達成のために、日夜御奮斗されておられますことに敬意を表します。これは、非常に困難なことではあるが共産主義者として、みんなで取り組まねばならない問題だと思えます。この問題について、私共なりに討論しておりますが、私共の愚見を述べて御教示を仰ぎたいと存じます。

第一点は機関紙の統合問題です。

御承知のように、組織統一の必要性を痛感している共産主義者陣営内には、それぞれの団体の機関紙が発行されております。組織統一が実現していない現状では、止むを得ないことかも知れませんが、私共としては何種類もの機関紙を読まされることは、経済的にも時間的にも、やりきれません。而も、それぞれの機関紙が経営危機にさらされているように思えます。若し機関紙が統一されれば経営の問題もある程度解決されるのではないかと考えますし、私共も一種類の機関紙を読めばよいことになり、経済的にも、時間的にも、機関紙の活用が充実されてくると存じます。組織統一が実現すれば、当然機関紙も統一されるものと考えられますが、逆に機関紙を統一することが組織統一を促進する結果になるのではないのでしょうか。

第二点は、第一点と同じ理由で理論誌の統一が考えられます。

現実に行き詰っている諸問題を科学的に分析し、その必然性と偶然性を理論づけることが必要だと存じます。また、毎月、何か一つのテーマを取り上げ、そのシンポジウムを載せる企画など必要ではないかと思っています。

第三点は反代々木の意識過剰の問題です。

私共の陣営、特に日本の声の発想や言論には反代々木の意識過剰が感じられますが、これは私共の認識不足なのでしょう。実質的にはどうあろうとも、外見上は代々木の勢力が創価学会と共に伸びていると思います。この現象を科学的に分析し、その将来性を展望することが必要ではないでしょうか。組織統一を志向する共産主義者陣営の理論と実践が正しければ、たとえ、現状は代々木よりも弱い勢力であつても、やがて大きく発展して行く筈だと思います。代々木が存在している現状では、代々木を意識しないわけには行きませんが、私共の求めている道は「日本の社会主義への道」の筈ですし、そのためにこそ代々木の誤りを批判しなければなりません。組織統一陣営の批判は反代々木の意識過剰による感情的な印象を与え、それが組織統一の促進を阻んでいるように感じます。

七月十九日

二本松地区組織統一準備会

組織統一準備委員会 御中